

# 子守つ子

アントン・チエーホフ Anton Chehov

鈴木三重吉訳

青空文庫



夜、子守子のバルカは、きくとれないくらゐの、ひくいこゑで、子守歌をうたひながら、赤ん坊のねてゐるゆり籠をゆすぶつてゐました。

「ねんくよう。」

ねんくよう。」

神だなの前には、ランプが緑いろにともつてゐます。壁から壁へ、細いひもがかけわたしてあつて、赤ん坊の着物や、大きなズボンなどが、うす黒くぶらさがつてゐます。ランプのつるしてあるま上の天井が、まるく、大きく、緑いろにかゞやいて、赤ん坊の着物やズボンの影を、長く、ゆり籠の上や、うづくまつてゐるバルカの肩の上に、おとしてゐます。

火影がゆれると、天井のまるいあかるみやいろくなものゝ影が、まるで風にあふられたやうにゆらゆらします。部屋の中は息がつまるやうに静かで、スープと靴のほひがしてゐます。

赤ん坊がひい／＼泣きます。あんまり泣きに泣いて、もう声もかれ／＼になつてゐるのに、それでもまだ泣きやみません。いつになつたら泣きたりるのでせう。バルカはねむ

くてくたまりません。

頭はたれ下り、頸はつツぱつて苦しくなり、まぶたも唇も、動かなくなりました。顔はひからびて、石のやうにこはゞつてゐます。頭が、まるでピンの頭ぐらゐにちゞこまつてしまつたやうな気がします。

「ねんくよう。」

「ねんくよう。」

バルカは、とぎれくうたひました。そこいらでこほろぎがチルくチルくと鳴いてゐます。となりの部屋からは、親方とおかみさんのいびきがきこえます。

ランプがゆらぎました。緑いろのあかるみと物の影とが、あちこちと動きまはつて、バルカの動かない目の中に、そつとすべりこみました。すると、ねむりかけてゐるバルカの頭の中には、さま／＼なまぼろしがうかびました。――

空を、雲が赤ん坊のやうに泣きながら、きれ／＼になつてとんでいきます。と、風がふいて来て、雲がきえて、こんどは、どろく／＼にぬかつた広い路がみえ出しました。路の両がには、つめたいもやをとほして岡がみえます。不意に、だれだか、袋をしよつた、影のやうな人が、グシャツとぬかるみでころびました。

「どうしたの？」とバルカがきくと、

「ねむるんだ。ねむるんだよ。」と答へます。と、電線にとまつてゐる鳥が、赤ん坊のやうに泣きわめいて、ねむつたその人をおこさうとします。

「ねんくよう。」

ねんくよう。」

バルカはまたつぶやくやうにうたひます。すると、こんどは、じぶんが、まつ暗な、息のつまるやうな家の中にあるのがみえて来ました。

床の上にはお父つあんがねてゐます。お父つあんはとてもひどいぜんそくで、息をするのもやつとです。むろん口もきけません。たゞ息をはくたびに、車のやうなひゞきがのどからもれるばかりです。

「ぐる、るゝ。ぐるゝゝ。ぐるゝゝ。」

お母さんは、お父つあんが死にかけてゐるのをしらせに、地主さまのところへいきました。さつき、もうずつと前にいつたのに、いつになつたらかへるのでせう。バルカは、はたにねころんで、お父つあんの「ぐるゝゝ」をきいてゐました。

だれか、戸口に馬車をとめました。地主さまのおやしきからよこして下さつたお医者さ

まです。お医者さまは、家の中へはいつてきました。まつ暗なので姿はみえません。その人がせきをするのと、戸のきしるのだけがきこえます。

「あかりをつけろよ。」

お医者さまがいひます。

「うゝ、ぐるゝゝ。ぐるく。」とお父つあんが答へます。お母さんがかへつて、マツチをさがしはじめました。

「先生さま、ぢきでござえます。ぢきでござえます。」

お母さんはかういひながら、ろうそくをともして、おもてへとび出して、先生と一しよにもどつて来ました。

「どんなぐあひだ。」お医者さまは、病人をのぞきこんで聞きました。

「おい、おかみさん、おまいたちは病人をほつぽり出しておいたんだな。」

「へえ、いや、先生さま、もうおむかへが来るんでさあ、どつちみちもう長いことはありません。」

「馬鹿。おれがなほしてやるよ。」

「お願えしやすだ。へえ、どうもありがとうござえますだ。でも、どうせ死ななきやあな

んねえだら、やつぱり死ななけきやあなりません。」

「これあ病院にいれなけれやあだめだよ。」

お医者さまは、診察をするといひました。

「今すぐいくといゝんだが、今夜はもうおそいな。病院ぢやみんなねてるかもしれない。まあいゝだらう。心配するな。おれが今手紙を書いてやるからな。」

「あもう、先生さま。」と、お母さんがこまつたやうにいひました。

「うちにや馬がないんで。」

「馬がない？ うん、ぢやあ一頭かしてもらふやうに地主にはなしてやらう。」

お医者さまはかへります。あかりはけされました。バルカは、又お父つあんの「ぐるゝ」をきくばかりです。半時間ほどもたつと戸口に馬車がつきました。こんどのは、お父つあんを病院につれていく馬車です。そしてお父つあんはいつてしまひました。

夜があけて、はれ／＼とした朝が来ました。お母さんはお父つあんのがしんばいなので、病院へいきました。

と、赤ん坊が泣いてゐます。そのそばで、だれかゞ歌をうたつてゐます。

「ねん／＼よう。」

ねんくよう。」

お母さんがかへつて来ました。

「ゆんべはよかつたのに。」とお母さんは、すゝり泣きをしながらつぶやきます。

バルカは胸が一ぱいになつて、森の中へいつて、ひとりでしくく泣きました。

「お父つあんは死んでしまった。おゝ、お父つあん。」

ごつん、と頭をぶたれて、はつとバルカは目がさめました。目のまへには、親方が立つてゐます。

「やい、なにをしてやがるんだ。坊やが泣いてゐるぢやねえか。ねむるやつがあるか。」

親方は、またびしやんとバルカの頬をなぐりつけました。バルカは、またうとくとゆり籠をゆすぶつて、子守歌をうたひ出します。部屋の中の影はぶるくとふるへうごいて、バルカにまばたきをしてみせ、すぐに又バルカの頭の中にすべりこんで、まぼろしになりました。――

またどろくの、ぬかるみがみえて来ました。袋をしよつた人が、グシヤツところがつて、ぐうくねこんでしまひます。あゝ、あんなふうにごろつとねころんだならば。おゝ、ねむい、ねむい、ねむい。



だけど、お母さんがやつて来て、はやくくとせかせます。バルカは、お母さんと、町へ仕事をさがしにいくのです。

「どうぞ一銭やつて下さい。」

お母さんは、あふ人ごとに言葉をかけます。

「その子をおくれよ。」

だれか知つてゐる人のやうな声がします。

「おい、その子をおくれつたら。」

はつと、バルカはとびおきました。おかみさんがそばに立つてにらみつけてゐます。

「おまいはねてゐたんだね。ばか。」

バルカはだまつてつつ立つてゐます。すると、部屋の中が、だんく水いろにあかるんで来て、ズボンの影も、緑いろのランプの光も灰いろにうすれ、やがて、壁の中へすひこまれるやうに消えてしまひました。夜があげて来たのです。おかみさんは、赤ん坊をうけとつてお乳をのませると、胸のボタンをはめながらいひました。

「まだ泣いてるよ、この子は。魔がさしてゐるんだよ。」

バルカは、赤ん坊をまたゆり籠に入れて、ゆすぶりはじめます。部屋の中には、もうな

んの影もないので、まぼろしがのりうつゝてくることもありません。そのかはり、たゞ、ねむくてたまりません。バルカはねむ気をおひはらほうとして、籠のはしに頭をおしつけて頭で籠をゆすぶります。それでもすぐにまぶたがたるんで、頭がおもくなつて来ます。

「バルカ、ストーブをたきつけろい。」

戸のむかうから、親方がどなりつけます。さあ、いよくバルカの仕事が始まりました。バルカは、まきをとりに、物置へかけだします。それがうれしくてたまりません。かいたりあるいたりしてゐれば、じつとすわつてゐるときよりも、ねむくならないからです。まきをとつて来て火をおこしてゐると、こはばつてゐた顔があたゝかにほぐれ、目もはつきりとさめて来ました。

「バルカ、湯わかしをもつて来てよ。」

おかみさんがどなります。こんなふうには、あとからく、いろいろな命令が出て来るのです。

「バルカ、親方の靴をおみがき。」

バルカは床に膝をついて靴をみがきはじめます。この大きな靴の中に頭をつツこんでぐうぐうねむつたら、どんなに、気持でせう。かう思ふと、急に親方の靴がふくれあがつて

部屋一ぱいにひろがりだしました。はつとして、バルカは靴ブラシをおとしました。けれど、すぐまた頭をふると、きよろきよろとあたりをみまはしました。なんにも大きくなりはいないぢやないかといった顔つきです。

「バルカ、おもてをおはきよ。」

バルカは、おもてをはくと、もう一つ店のストープに火をおこして、こんどは台所へかけていきました。台所には、いろんな仕事でバルカをまちかまへてゐます。なかでも、ジャガイモの皮むきがひと仕事です。バルカは目がちらちらして、ナイフをすべりおとしました。すると、両そでをたくしあげた、体のがんじょうなおかみさんが、頭がわれるやうにどなりつけます。それがすむと朝ごはんのお給仕をして、縫物をして、それからお午になり、夕方になります。

だんく、くらくなつていく窓をみてみると、バルカは、なぜだかじぶんでもわからないうなりに、ひとりでにほゝえまれて来ます。今にぐつすりねむれるよと、かう、くらやみが言つてくれるやうに思はれるからでせうか。しかし、夕方は夕方で、またお客さまが大きい来ます。

「バルカ、お茶の支度をおし。」

おかみさんがどなります。湯わかしが小さいので、お客さまに、のみたりるだけお茶をのませるには、水を五へんもさしかへなければなりません。

「バルカ、ビールをかつてこい。」

「バルカ、酒をとつてこい。」

「コロツプぬきはどこだい、バルカ。」

「にしんを洗ふんだつてばよ。早くおしよ。」

やつと、お客さまはかへりました。あかりはけされ、親方もおかみさんも、寢床へはいつてしまひました。

「バルカ、ゆり籠をゆすぶりな。」

「ばんおしまひの命令です。」

こほろぎがチルくくくと鳴いてゐます。天井でぶるくふるへてゐる緑いろのあかみ。ズボンや赤ん坊の着物の影。バルカは、そのうちに、またまぼろしをみるのです。

「ねんくよう。」

ねんくよう。」

バルカはつぶやくやうにうたひます。赤ん坊は泣いて泣いて、へとくになつても泣き

つゞけます。バルカの頭の中には、又ぬかるみがありました。袋をしよつた人。お父  
つあん。お母さん。

あゝ、ねむい。おゝ、ねむい。



# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第八巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1932（昭和7）年7月

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2005年8月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 子守っ子

アントン・チエーホフ Anton Chehov

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木三重吉訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>